

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520415

研究課題名（和文）宮城県登米市中田町方言のテンス・アスペクト・ムード体系

研究課題名（英文）Tense-aspect-mood system of Miyagi-Tome-Nakada dialect.

研究代表者

佐藤 里美（SATO SATOMI）

琉球大学・法文学部・教授

研究者番号：00274879

研究成果の概要（和文）：宮城県登米市中田町方言のテンス・アスペクト・ムード体系の意味・機能・使用の実態を、終止の単純述語、可能・必然のモーダルな複合述語、条件づけを表現する従属複文の述語の3つの場合に分けて分析・記述した。並行して、地元の方言話者3名による約20時間分の自然談話を高音質のデジタル音声資料として記録した。今後の多様な文法分析に供するため、本資料の文字化作業を継続中である。

研究成果の概要（英文）：This study aims to analyze and describe the state of the meaning, function and usage of tense-aspect-mood systems of Miyagi-Tome-Nakada dialect, by examining three types of predicate: simple predicate in finite form, modal complex predicate of possibility and necessity, and predicates of conditional complex sentences. One another purpose of this study is to create the opportunity to digitally record the natural conversational discourse of three native speakers of this dialect, for about 20 hours, as sound data of high quality. This data is now being transcribed to provide for further grammatical analyses.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2009年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2010年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言 述語構造 テンス・アスペクト・ムード体系 複合述語 条件づけ

1. 研究開始当初の背景

近年、類型論や言語接触論の成果を取り入れながら、伝統方言のみならず、共通語化が進みつつある諸方言にも見られる多様な現象を精密に分析・記述することによって、日本語文法研究に貴重な知見がもたらされつつある。こうした現代文法論の水準を踏まえた、形態論的なカテゴリーとしての方言の述語構造、特にテンス・アスペクトの研究は、西日本方言において先行している。東北方言については、南陽方言をとりあげた金田1983、

鶴岡方言をとりあげた渋谷1994などがあるものの、宮城県方言についての研究はほとんどなかった。

しかし、90年代以降、東北大学国語学研究室を拠点に、標準語のテンス・アスペクト研究の進展を踏まえつつ、仙台方言、石巻方言のテンス・アスペクトをとりあげた竹田・吉田2000、竹田2003などの、注目すべき論考が現れるようになった。県北部の中新田方言をあつかった加藤他1998も、仙台方言以外の宮城県方言の本格的な文法研究を切り開

くものとして注目される。

研究代表者がその執筆者のひとりでもある八亀他 2005、工藤他 2005b は、宮城県登米市中田町方言（以下「中田方言」）を対象として、宮城県北部方言の述語構造の総体を本格的に論じた最初の論考である。ある文法形式の意味・機能を記述する場合、当該方言に固有な形式だけに注目するのではなく、それと張り合うかたちで存在している形式との対立関係や、他の文法的なカテゴリーとの相互関係の中で観察することが重要であることを説き、方法論の観点から従来の方言文法記述の問題点を摘出した。

本研究は、これらの諸研究の成果を生かしつつ、中田方言の動詞・形容詞・名詞述語のテンス・アスペクト・ムード (TAM) 体系の包括的な記述を目指す。この種の記述は、東北方言の文法構造の共時的体系と通時的動態の解明に向けた基礎データの蓄積に寄与するものである。

2. 研究の目的

この方言のテンス・アスペクト・ムード体系の意味・機能・使用の実態を、終止の単純述語、可能・必然のモーダルな複合述語、条件づけを表す従属複文の述語の、三つの場合に分けて、分析・記述する。あわせて、消滅しつつある伝統的な中田町方言を音声データベースとして記録・保存することで、今後の多様な文法研究に資することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査票に基づく聞き取り調査を実施した。基本的に工藤編 2005a のテンス・アスペクト調査票、ならびに工藤編 2006 の形容詞・名詞述語調査票をもちいた。第二過去形「スタッタ」の過去パーフェクト用法と反実仮想用法、意志・推量・勧誘を表現する「スルベ」形を中心に調査項目を追加した。

(2) 内省によって文の適格性を確認した。研究代表者はこの方言の母語話者であり、生年の 1953 年から 1995 年までの 40 数年間のほとんどを同町内とその周辺で過ごした。内省がきき、他のインフォーマントとの自然な対話が可能であることは、分析結果の妥当性を確認するうえで有効であった。

(3) 聞き取り調査及び内省から導いた仮説を自然談話の録音資料中の実例によって検証した。80～83 歳の男性 3 名をインフォーマントとする自然談話の録音と、その文字化資料の一部を参考にした。録音資料は、今回の

文法研究にかぎらず、今後の多様な観点からの文法分析のための資料となる。

4. 研究成果

(1) 終止の単純述語

第二過去形「スタッタ」の体験性明示用法、過去パーフェクト用法、反実仮想用法、並びに、叙想法「スルベ」形が表す意志・推量・勧誘等の多義的なモーダルな意味・機能を中心に記述した。

①八亀他 2005 の分析を基本に叙実法の分析と記述を行った。動詞述語については、意味的なタイプと時間的限定性の観点から、動的運動動詞（動作動詞・変化動詞）と静的運動動詞（状態動詞）の場合、及び、反復・習慣・一般（特性）の場合とに分け、形容詞述語・名詞述語については、状態、特性、質を表現する場合に分けて、それぞれのテンス・アスペクトの意味、ムードの意味を記述した。

②第二過去形については、動詞述語文におけるアクチュアル性明示用法、過去パーフェクト用法、動詞・形容詞・名詞述語文における体験性明示用法、仮定条件文の述語にあらわれる反実仮想用法について記述した。

③叙想法スッペ形は叙述文の述語としてテンス・アスペクトの意味を担いながら、推量・念おしをあらわす。さらに、人称制限をとらないながら、意志、勧誘の表現機能を担う。ステッペ、スタベ、ステダベ、スタッタベ、ステダッタベ形など、述語の基本形の TAM 体系としての叙想法の全体にわたって記述した。

(2) モーダルな複合述語

可能表現スンニイ、必要・義務表現スネゲネ、許可・許容表現ステモイを中心に、中田方言のモーダルな複合述語の意味・機能を明らかにした。不可能表現サエネ、不必要表現スネクテモイ、禁止表現ステワガンネとの対立の中で、それぞれの形式があらわす意味・機能を記述した。いずれも平叙文の述語に現れ、テンス・アスペクト・認識的ムードのカテゴリーをもつ。それぞれの第二過去形、叙想法形式の意味・機能についても記述した。

①中田方言の能力可能も条件可能も、基本的にスンニイ（完成相；することができる）、ステンニイ（継続相；していることができる）の形であらわされる。

②肯定の場合、可能動詞形式「読める」に相当する総合形式はないが、否定、すなわち能力不可能・条件不可能は、接辞-(r)aene の付加による総合形式サエネ（されない）によってあらわされる（サエネの形もあるが、これは「し得ない」の訛音）。

③肯定、否定のいずれの場合にも、第一過去形（スンニイガッタ、サエネガッタ）と第二過去形（スンニイガッタッタ、サエネガッタッタ）とがある。いずれも過去における能力の所持・不所持や条件の存在・不在による可能・不可能をあらわすが、第二過去形をもちいると、知覚体験性、直接体験性が前面化するか、可能性から実現の意味に移行するか、いずれかに傾く。

④上記完成相に対して継続相は、非過去形がステンニイ、過去形がステンニイガッタ（第一過去）、ステンニイガッタッタ（第二過去）である。否定継続形式はそれぞれ、ステラエネ、ステラエネガッタ、ステラエネガッタッタである。第一過去形ステダ・スネダがアクチュアルな現在（発話時における動作継続）をあらわせるのに対して、ステンニイガッタ、ステラエネガッタは現在をあらわせない。第二過去形が直接体験性、知覚体験性をあらわし、人称制限がない点は現実表現の場合と同様である。

⑤実現をあらわすには現実形スル（スタ）を使用し、可能形スンニイ（スンニイガッタ）は使えない（「柿やっとモイダ」「*柿やっとモグニイガッタ」）。カゲダ（書けた）のような可能形式が使えないこともないが、標準語的である。竹田 1998 に指摘されているように、自発形が能力可能や実現の表現に使用されることもある（戸アガル（開く）、アガッタ（開いた））が、語彙は限定されている。

(3) 条件づけ的な従属複文

動詞・形容詞・名詞の条件づけ的な諸形式の意味・機能を分析・記述した。条件づけ的な従属節をおおきく原因節（スッカラ、スタガラ、スタッタガラ）、条件節（仮定的、反事実的、事実的；用例後掲）、譲り条件節（ステモ・スタッテ・スタタッテ）、契機節（スト、スツド）の4種に分けて、それぞれの意味・機能をあきらかにした。加藤他 1998 中の三井論文を参考に、条件節については事実的条件、仮定的条件、反事実的条件の3種に下位分類した。記述に当たって、従属節と主節にさしだされる命題のテンス・アスペクト・ムード的特徴、時間のありか限定性と意味類型との関連に特に着目した。ここでは、動詞の条件節をもつ複文についてのみ概説する。

①仮定的な原因・結果（スレバ・スタラ、スンダラ・スッコッタラ（スッコッテ））

スレバ形・スタラ形を条件節にとる場合、動作が一時的であれば、条件節にも主節にも仮定的な事態がさしだされる。反復・習慣的

な動作であれば、事実的なものとしてさしだされる。

スンダラ形は標準語の「するなら」に、スッコッタラ（スッコッテ）形は「することなら」に相当する。類似形にスンダゴッタラ（スンダゴッテ）がある。これらの使い分けについては、なお分析を要する。

②反事実的条件（スタラ・スタッタラ、…スタッタ）

スタッタラ形は条件節におかれて、反事実的な出来事をさしだす。その場合、第二過去形で主節にさしだされる動作も反事実的である（アンドギ ユーゴド キーデダッタラ、コイナ フーニ ナンネガッタッタ〈あの言うことを聞いていたら、こんなふうにはなかった。〉）同様の意味は、条件節に第一過去形を配置することでも表現できる。その場合も主節は第二過去形でなくてはならない（「ハズズニ デダラ、マニアッタッタ」（8時に出たら間に合っていた））。

③事実的な条件（スタッケ、スタレバ）

スタッケ形を条件節にとる場合、主節の述語も過去テンスの形をとる。これに対応する非過去形（*スッケ）はない。前件も後件も事実的なものとして差し出される。

スタレバ形を条件節にとる場合にも、前件・後件ともに事実的であるが、動作主体は一人称あるいは一人称側にある人物に限定される傾向がある。使用頻度は低い。スタレ、スタレアなどの音声的な変種がある。

両形式とも原因節（スタガラ等）に近い意味を実現し、原因節に容易に移行する。

(4) 自然談話録音と文字化

①3名の方言話者から、個人史、家族史、地域史、日常生活、職業生活、祭祀、習俗、名所・旧跡、時事、災害、戦時下の生活、交友、その他さまざまなトピックをとりあげ、雑談の形で話していただいたものを録音した。

②地元有志作成の方言集に収められた語彙・語法について、聞き取り調査を行い、そこでの方言によるやりとりを録音した。

③調査票による聞き取り調査もできるだけ方言で問いかけ、方言で答えてもらった。その方言でのやりとりを録音した。

④地元に伝わる民話、小話の類を録音した。すでに文字化された方言記録を読むという形なので、談話の自然性はやや損なわれるが、語彙や文法の分析のための資料としては有用である。

(5) 本研究の意義と課題

①宮城県方言の従来の研究対象は仙台市方

言が中心であり、県内のその他の地域、特に
県北内陸部、三陸沿岸部の方言の文法研究は
あまり進んでいない。本研究によって、宮城
県方言研究の欠落部分がある程度埋めるこ
とができた。

②「ステダ」形、「スタッタ・ステダッタ」
形など、その意味・機能が標準語とは異なる
現象を含め、述語体系を詳細に分析・記述す
ることができた。時間的限定性や証拠性など、
従来の方言文法研究ではあまり取り上げて
こなかったカテゴリーにも着目し、形容詞・
名詞述語をも視野に入れることによって、よ
り包括的なパラダイムを提示した。

③本科研究の実施に当たって、大阪大学の工藤
真由美氏、京都光華女子大学の八亀裕美氏
のご指導をいただいた。研究代表者の力不足
から両氏の助言を十分に生かすことはでき
なかったが、多様な観点から方言分析の方
法についてご教示いただき、得るところが大
きかった。

④中田町方言話者として3名の方を研究協
力者をお願いした。町内石森地区の方言の
インフォーマントとして得がたい人材である。
この地域の伝統方言の文法構造を解明する
重要な手がかりが失われる前に、自然談話
を音声データとして記録・保存することはき
わめて重要な課題だが、この方々の献身的
なご協力によって、この課題解決に向けて
一歩踏み出せたのではないかと思う。

⑤本研究から得られた知見は、末尾にあげ
た論文、口頭発表をはじめ、研究代表者が
専門とする現代日本語の文法記述に生かす
ことができた。

⑥方言文法の精密な記述のためには、膨大
な質問項目をもつ調査票と、それぞれの項目
の質問意図に精通したインフォーマントが
不可欠である。当該方言の所有者である
だけでなく、文法の観点から母方言を分析
できるインフォーマントを継続して得ること
が重要である。

⑦インフォーマント3氏の中田方言はより
伝統方言に近く、研究代表者(佐藤)の中
田方言は標準語や県内他地域の方言の影響
のもとで変容しつつある。両者の方言を比
較することによる、当該方言の述語構造の
通時的変化についての考察は今後の課題
である。

(6) 主要参考文献

- ①奥田靖雄(1986)「条件づけを表現する
つきそい・あわせ文—その体系性をめぐ
って—」(『教育国語』87号 p.2-19 むぎ
書房)
- ②加藤正信・遠藤仁他(1998)『宮城県
中新田町方言の研究』(研究代表者加藤正
信・遠

藤仁、文部省科学研究費補助金基盤研究
(B)「宮城県における伝統的方言体系の
記述とその変容についての研究」研究成
果報告書)

③金田章宏(1983)「東北方言の動詞の
テンス—山形県南陽市—」(『琉球方言
と周辺のことば』千葉大学教養部)

④工藤真由美編(2004)『日本語のア
スペクト・テンス・ムード体系—標準語
研究を超えて—』(ひつじ研究叢書言語
編第35巻、ひつじ書房)

⑤工藤真由美編(2005a)『方言にお
ける述語構造の類型論的研究』(研究代
表者工藤真由美、平成16年度科学研
究費補助金基盤研究(B)(1)研究成
果報告書)

⑥工藤真由美・佐藤里美・八亀裕美
(2005b)「体験的過去をめぐって—
宮城県登米郡中田町方言の述語構造—」
(大阪大学大学院文学研究科日本学
講座『阪大日本語研究』17号, p.1-25)

⑦工藤真由美編(2006)『方言にお
ける述語構造の類型論的研究Ⅱ』(研
究代表者工藤真由美、平成17年度科
学研究費補助金基盤研究(B)(1)研
究成果報告書)

⑧言語学研究会・構文論グループ(1985)
「条件づけを表現するつきそい・あ
わせ文(三)—その3・条件的なつき
そい・あわせ文—」(『教育国語』83
号 p.2-37)

⑨渋谷勝己(1994)「鶴岡方言のテ
ンスとアスペクト」(国立国語研究所
報告109-1『鶴岡方言の記述的研究—
第3次鶴岡調査報告1』秀英出版 p.
236-266)

⑩竹田晃子・吉田雅昭(2000)「宮
城県仙台市方言の研究—仙台市方言
の体系と変容4. テンス・アスペクト—」
(『宮城県仙台市方言の研究』小林
隆編 東北大学国語学研究室)

⑪竹田晃子(2003)「宮城県石巻市
方言の研究—テンス・アスペクト—
体系と属性差—」(『宮城県石巻市
方言の研究』小林隆編 東北大学国
語学研究室)

⑫八亀裕美・佐藤里美・工藤真由美
(2005)「宮城県登米郡中田町方言
の述語のパラダイム—方言のアスペ
クト・テンス・ムード体系記述の試
み—」(日本語学会『日本語の研究』
第1巻1号, p.51-64)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

①佐藤里美「述語のひろがり—合成
述語を中心に」2010『国文学解釈と
鑑賞』5巻7号(至文堂) 50-59

②佐藤里美「名詞述語文のテンポ
ラリティ—」(2009)『ことばの科学』
12号(むぎ書房)

〔学会発表〕（計 1 件）

①佐藤 里美「動詞のムード」教育科学研究
会国語部会、2009 年 6 月 21 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 里美 (SATO SATOMI)
琉球大学・法文学部・教授
研究者番号：00274879

(2) 研究協力者

工藤 真由美 (KUDO MAYUMI)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：30186415

八亀 裕美 (YAKAME HIROMI)
京都光華女子大学・人文学部・准教授
研究者番号：60346153